

近頃春夫には、気になる言葉がある。新聞を見てみると、ついその言葉が目止まる。テレビを見てみると、思いがけずその言葉に出くわす。雑誌や本のタイトルにも登場し、春夫の視界に否応なく入ってくる。そのたびに春夫は、はつとしたり、ドキリとしたり、あるいは胸を痛めたりする。

そんなことが重なると、毎回顔を背けてばかりもられない。いつまでも、チクリチクリと体のどこかを突かれるより、いつそしっかり向き合ってみようか、とも思うのだ。それでいて、いざとなると、やはり腰が引けてしまう。

「トト、か」

春夫は新聞記事を思い出し、そつと呟いてみる。畳の上に直に座った春夫の背は、五十歳という年齢の割に丸みを帯びている。トトという言葉とため息のせいで、なおさら背中丸みを増した。

「トトねえ」

俯いたまま頭を掻くと、はらはらと白いものが降ってくる。畳に顔を近付け、思い切りふつと吹く。舞い上がったフケは、脱ぎっぱなしのパジャマの上に、点々と散った。

「トト、トト」

しよぼしよぼした春夫の目は、呟くたびに小さくなる。ついに両目が閉じられると、春

夫はいきなり頭を抱えた。丸い背をさらに丸くし、うずくまるように小さくなる。それもしばらくのことだった。すぐに背中が痛くなり、はあつ、と気の抜けた声が出た。

「裸って、ニート？」

肩を落とした春夫の背は、見る影もなく小さくなった。